

北杜夫ノオト 2 —『白きたおやかな峰』をめぐつて—

馬 場 重 行

一九六〇年代はまだへ近代文学々が延命しており、小説世界に活気が漲つていた。文壇なるものが確固として存在し、武者小路実篤、志賀直哉、川端康成といった文学史に名を残す作家たちが多く存命していたのである。そうした状況のなかで読書人の支持を得ていた新潮社の「純文学書下ろし特別作品」シリーズは、今では殆ど見かけなくなつた重厚な箱入りで、表に著者のことばがあり裏側には作家や評論家らの評が刷り込まれていた。北杜夫の『白きたおやかな峰』が同シリーズの一冊として刊行されたのは一九六六（昭和41）年十一月のこと、著者のことばとして「山にのめりこもうとする気持と、そうした密着を拒否しようとする意志との相克から、この小説が生まれた」とある。

裏面には、林房雄の「男らしい、いさぎよい小説」、吉田健一の「登山家が一步一步と目標に近づくのと同じ着実な手付きで話を進めて行く」、あるいは串田孫一の「新しい創造を成功させた」などの評が掲載されている。これらは惹句なので当然のことながら高評価となつてゐるが、しかしそこに止まらず、『白きたおやかな峰』という作品の持つ魅力のポイントをそれなりに突いてゐるようだ。特に、安岡章太郎の「新雪のようにさらさらした純白の文章」「無垢な抒情」といった評言などは、この作品に対する本質的な批評としても受け取ることができよう。七二七三メートルの標高を誇るカラコルムの未踏峰ディラン登頂をめぐる『白きたおやかな峰』は、「どくとるマンボウ」シリーズで圧倒的な人気を誇っていた北杜夫が、遠征隊に参加した自身の経験を基に描き出した作品である。

一九六七（昭和42）年五月には、この作品と『どくとるマンボウ航海記』の二作を作家自身が朗読した「朝日ソノラマ」というソノシートまで刊行されているところを見ると、当時の人気作家北杜夫の話題作であった様子がよく分る。

隊長の小滝、副隊長の久能、「専門は精神科で」「医者は副業で小説を書くのが本業という」ドクターの柴崎、マネージャーの小倉、勇猛果敢な増田と京都弁のためにおつとりした感じを与える田代の二人は、作品末尾で第二次アタックを試みる。第一次アタック隊に選ばれたのは羽瀬と関谷、その他曾我と竹屋、現地の連絡将校の大尉、そして隊の食事を賄うコックのメリバーン、現地のポーターたちから成る「二百名を超す集団」がこの遠征隊である。

作品は、遠征隊の個々のメンバーの心情表現を織り交ぜながら、ディラン登頂が果たせるか否かというスリリングな場面が展開され、読む者を惹きつける。もちろんノン・フィクションではなく虚構が施されているが、作者の実体験に裏打ちされた自然描写などは迫力に富む。

北は「白きたおやかな峰」でカラコルムへ行つた折の副産物的な小品」（「創作余話（10）」、「北杜夫全集」第六巻、新潮社、一九七七（昭和52）年六月）と言う「白毛」（「展望」一九六六（昭和41）年五月）を書いているが、そこには「山の中には雪崩の音を聞きながら四十日間いた」とあり、カラコルムでの生活が自身の身体に沁み込んでいた様子が描かれている。また『どくとるマンボウ途中下車』（中央公論社、一九六六（昭和41）年一月）には、この遠征隊での体験がやや滑稽さを強調した形で具体的に描かれている。

作家の体験が下敷きになつていているところから野坂幸弘は、「記録的小説という体裁の作品」としつつ、しかし「ドクターに焦点をあわせながらこの作品を読んでみると、はじめの記録的山岳小説という印象が、いささか変化してくる」と述べ、「作者、北杜夫が、ドクターを徹底的に書けない人間として造型することによって、一巻の表現者たりえている事情を明らかにするもの」という見解を示している（「白きたおやかな峰」・「解釈と鑑賞」一九七四（昭和49）年十月）。

『白きたおやかな峰』に対する最も真正面からの批評は、作者の北自身が認める通り三島由紀夫のそれであろう。

「アプローチ」と題されてあるというその批評は公刊されていない。北杜夫が三島亡きあと書いた「表面的な思い出など——三島由紀夫氏」（『新潮』一九七一（昭和47）年十一月）の中で引用されている。「次に記す昭和四十二年八月の手紙を書き写すかどうかを、私はしばらくためらった。これは私にくださった最後のかたじけない手紙で、私一人隠し持っているのが自然のことであろう」と北は公表への逡巡を述べたあと、「それはきびしい批判で、『白きたおやかな峰』についての批評の中で、いちばん私が胸に応えたもの」と告白する。この三島の批評を抜粋しておく。

まず手紙が引用される。

（略）実は小生恥ずかし乍ら一種の『友情』を押し売りいたします。同封の原稿は、文学界から五枚の原稿を頼まれ、書いたものですが、思ひ返して、文学界には他の原稿を送り、これは貴兄にお送りすることにしました。大ぜいの第二者に読ませるより、貴兄御一人だけに読んでいただきべき原稿である、と思ひ返したからであります。

そして「「アプローチ」と題された五枚の原稿」が引用される。

北杜夫氏の「白きたをやかな峰」を読んでゐて、私はたびたびこのアプローチといふ英語を思ひ出した。山岳小説だからといふばかりではない。小説といふものは、何に向かつてアプローチするものなのか、といふ問題が、これを読んでゐる間、私の頭を離れなかつたのである。／この小説の後半は、その迫力、そのクライマックスの凄絶さにおいて、見事の一語に尽きる。読んでみて胸がドキドキしてくる。登山隊に思はず声援を送りたくなる。自分も一緒に登りつつあるつもりで、両手を崖へかけてゐるやうな気分になる。標高差わづか七、八メートルのところまで来て、／「しかも、そのまろやかな山頂、その右端がきらりと輝いた。純白なうへにも眩ゆく、玲

瓏と輝いた」／といふと ころは、ディランといふ山の女性的な魔性をみごとに表現してゐる。／しかしそれが文学的感動かといふと、どうもさう云ひきれないものが残るのが、この作品の疑問点である。ここまで来ると、山が文学的象徴として高まつてゐるといふのではなくて、文学の代りに山が代置されてゐるやうな疑ひが起きて来る。(略) この種の作品の頂点では、ディラン登頂の挫折の悲劇的感動が、そのまま文学的感動と同質になり、山と文学とが同じ標高で併立してゐなくてはならないのである。(略) 登場人物は概して浅いノミで刻まれ、前半は單なる紀行文や記録の平板な文体で、ドラマは山一つに引きしほられてゐる。山一つに引きしほられてゐるといふのがわるいのではない。問題は、その山のイメージが、あまりにも文学的に貧しいのである。(略) 「世界中の登山家たる者の夢の象徴である高峰が」／「その背景をなす虚空のあくまで色濃い群青さによるためかも知れなかつた」／「なんという完き純白の姿、・・・まつたく白かつた。どこもかしこも白かつた。・・・ディランはお伽の国の魅惑にみちた特別製の砂糖菓子のように眩ゆく光り輝いた。裸身をむきだしにして一同をさし招く純白のあえかな美女」／「この大自然の形造る魔術に幻惑されて」／かういふ言語表現は、ほとんど何も言つてゐないに等しいのである。(略) 作品全体は、果敢な登山隊に対する一ドクターのオマージュとも読めるのであるが、一つの行為に対する、言語の側からの憑依力が欠けてゐる点が、いかにも残念である。表現者は行為者に対立し、同等の重みを持たねばならないのだ。表現者には、そもそも行為者にとつては一つの目標であるにすぎぬ山を、目標としてではなく、存在として十分に準備し、イメージとして十分に喚起する使命があつた筈だ。(略) 文学はディランよりもさらに意地悪な、さらに魔性に富んだ山である。／「白きたをやかな峰」には、作者の物語的構成力と、挿話の巧みな配列と、漸層法と、そして何よりも、強い若々しい筆力が具はつてゐるだけに、なほのこと、私は右の諸点を憾みに思はずにはあられなかつたのである。

小説の読み巧者でもあつた三島の面目躍如たる文章であり、『白きたおやかな峰』に対する批評として必読の重要な

文献と考え、敢えて長々と引用した。『楡家の人びと』に対しては、「これこそ小説なのだ！」（圈点原文）と絶賛を惜しまなかつた『楡家の人びと』新潮社、一九六四（昭和39）年四月、箱裏）三島の、この酷評とも言えそうな評言には、北杜夫という作家に対する並々ならぬ愛情が裏返しの形で現されていると思う。正に「一種の『友情』を押し売り」するものと言つてよいだらう。

突然北に電話をかけ「あの題名は文語と口語がごっちゃになつてゐる。白いたおやかな峰か、或いは白きたおやかな峰か、白きたおやかの峰、とすべきだろう」と三島が指摘したことがこのエッセイの引用文の前に記されていた。北は「語感の点から、また短歌などで文語、口語をごっちゃにする例もあるので、私はそのままにした」と書いてゐるが、ことばに対する繊細な神経を持つていた三島が、題名についてわざわざ電話で注意したのに、「たおやか」を「たをやか」と書いていることに北は特に触れていない。旧仮名遣いで一貫していた三島なら当然と解したのかもしれないが、「アプローチ」における『白きたおやかな峰』の引用は原文通り新仮名遣いになつてゐる。非公表原稿故の混乱に過ぎないとも思われるが、あるいは三島の中に、「白き」という文語であれば当然「たをやか」という表記でなければならないという確固たる思いがあつたとも思われる。それを北はそのまま受け入れていたのではないだろうか。

そもそも北は、この「アプローチ」という批評をなぜ三島の死後に公開することにしたのだろう。「この五枚の原稿は本来、雑誌に発表するべく書かれたもので、公的な性質のものである」という北の弁明は、「大ぜいの第三者に読ませるより、貴兄御一人だけに読んでいただきべき原稿である、と思ひ返した」三島の思いからするとやや苦しいものがある。いちばん私が胸に応えたものであり、かつ三島文学研究者のためになると思われるゆえ、あえて引用しておく」と北は説明する。確かに、この評には三島由紀夫の読み違者な側面や文学に対する基本姿勢のようなものが現れており三島研究には役立つと思われるが、それだけが理由であろうか。この「胸に応えた」批評を公開することで、『白きたおやかな峰』という作品を自身でも相対化してみたいとの思いが北にはあつたのではないかと推測し

たくなる。

三島の批評の要点は、この作品の感動が文学固有の力によるものではなく、登山という行為に依拠しているという批判にある。行為と表現という、三島文学の基本認識からの問題指摘である。そうなつている要因として三島が挙げるのは、山のイメージの貧困さ、人物の描き方の問題等々表現に関わる難点である。

北は『白きたおやかな峰』について、「ぼくはざつくばらんに言つてしまふと、あれはちょっと高級な大衆小説だと思います」と述べ、三島の批評について「文学のアプローチと違つて、これは「單なる事実へのアプローチだ」と、そういうような非常に批判的な文章だった。これが、ぼくはどうも、あの小説に対する最高の批評みたいな気がするのですね」とも述べている（『国文学』一九七三（昭和48）年二月号「対談・物語りの重厚と洒脱」篠田一士との対談）。「ちょっと高級な大衆小説」という言い方は、今の感覚からするとあるいは高飛車な物言いのよう感じられるかも知れないが、純文学と大衆文学とが厳然と区分けされていた当時にあつて、北自身もそうした文壇意識を生きていた様子が伺える。それと同時に、北杜夫という作家がを目指していた文学世界がいかに高みに設定されているかも容易に想像される。息子と文学者という複雑な視点から書きだされた評伝文学の傑作と思われる『茂吉評伝四部作』に対しても、「そのゲラの余白に、「おれはこんなものを書くために生まれてきた男じゃない！」／などと、誰にともつかず乱暴な字で書きなぐつたりした」（『カラコルムふたたび』（『新潮』一九九二（平成4）年一月）北である。こうした言説と「最高の批評みたいな気がする」という三島評への反応を重ねあわせると、もちろん謙遜が色濃く混じってはいるものの、北が『白きたおやかな峰』を自らの純文学の代表作とは思わず、読物としての出来栄えに安住しているような様子も垣間見ることができる。

コツクのメルバーンに関しては、『白きたおやかな峰』の中で何度もその献身的な姿を印象深く記した通り、この後も『どくとるマンボウ途中下車』や『メルバーンの手紙』（『P.H.P.』一九六七（昭和42）年五月）などで繰り返しその人物像の魅力を語っている。何より北の最晩年の遺作の一つは先に引いた『カラコルムふたたび』であり、そこ

にはメルバーンとの四半世紀ぶりの再会の様が描かれていた。「メルバーンに会えるということだけで、私はカラコルム行を決意した」「今⁷の私は、ただただメルバーンに会いたいという一心で、他の仕事を放棄してまで、ここに来ている」「どうしてこれほど、あの愛嬌のある、同時にもの悲しげな彼の顔立ちが浮かんてくるのか不思議なほど」と、この作品で北はメルバーンのことを懐かしく思い出している。「それにしても、あいつはほんとうにいい奴だった」と、私はウイスキーをすすりながら、胸の中で呟いた。すると、年甲斐もなく、目に涙があふれてきた。涙まで出るとは自分でも意外であった」とあるように、作者の等身大として描かれる「私」は、メルバーンのことを思つて感情を高ぶらせるほどである。

もちろん、虚構作品の登場人物をそのまま実在の人物と重ねてしまうのは危険であり、「カラコルムふたたび」も小説という虚構の世界であることに変わりはない。しかしそれでもなお、老いた作家の心を強く揺らす貴重な思い出を長い時間に亘つて継続させるほどの人物は、それなりの独特な魅力を読者にもたらすのではあるまいか。少なくともメルバーンは、『白きたおやかな峰』にあって「浅いノミで刻まれ」ただけの人物とは思えない。

『白きたおやかな峰』は、各人物の心情を個別に語る、いわば〈神の視座〉から基本的には語られている。風景描写も同様である。例えば、冒頭部分の次のような場面。

どんな小さな山あれ、大地の隆起が見たかった。どんな細かいものあれ、水の流れが見たかった。そしてもう一つ、鮮やかな緑を……。日本の低い山々、そこでは今ごろどれほど美しく、こうして思い返してみると胸を締めつけられるほど美しく、しつとりと潤いに満ちて、樹々の緑が微風に揺れていることだろう。

これは、カラチの平坦な景色につくづく嫌気のさした田代の視点が前提となつてゐる。「隊の中でもつとも若く、

京都から参加した二人のうちの一人で、他の隊員からその京都弁をからかわれていた」とされる田代という「妙に親愛感を誘う」男の視点から捉えられた風景として語り手は語つてているのである。「私は視覚型の作家」「傲慢と諱」、『マンボウおもちゃ箱』新潮社、一九六七（昭和42）年九月）と自ら述べたように、北の作品には巧みな情景描写が多いが、『白きたおやかな峰』にはその才筆が至る所に溢れている。

先に引いた三島の批判する「世界中の登山家たる者の夢の象徴である高峰が」という描写も、この田代の眼差しが初めて捉えた風景として語られていた。「かういふ言語表現は、ほとんど何も言つてゐないに等しい」と三島は厳しく批判するが、まだディラン峰がどのようなものかすら理解していない時点での、田代という男の内面に映じた景色であり、作品の終盤、増田と二人で第二次アタック隊として登頂を目前にしながら疲労と寒さのために動けなくなるという、よく計算された冒頭と末尾の照応の妙を考えると、人物の視点と風景とのこうした重ね合わせの文体は、人と自然とを合体し、巨大な山岳に挑む卑小な人間の姿をより鮮烈に刻印する独自の語り口となつているとも評価できよう。

〈神の視座〉から登場人物それぞれの内面を語り、自然描写と重ね合わせることで読み手に「自分も一緒に登りつつあるつもりで、両手を崖へかけてゐるやうな気分」（前掲三島）を与える作品。そうした中、作者の北にとつては、その晩年に近い頃まで強い印象を残し続けたメルバーンは、その心情が遂に語られることがない。

若い頃は諸外国の遠征隊にハイ・ポーターとして参加し、「パキスタンの公用語であるウルドゥ語、このナガール地方の方言であるシナ語、フンザの方言であるブルジヤスキー語、かなりの数の英語の単語を話す」というメルバーンなる人物は、献身的なその姿勢や日本遠征隊のことを思つて涙さえ流すという人情味溢れる姿など、『白きたおやかな峰』において最も魅力的な人間として描かれていると思われる。しかし、彼自身のその胸の内は不明であり、その視線が自然をいかに捉えているかは語られることはない。連絡将校の大尉と同じく単に外国人だからかも知れないが、ここには『白きたおやかな峰』における語り手の、文学に対峙する姿勢の反映を見てとることも可能である。

頂上はまだうすほんやりと見えていた。右手から灰色の雲が現れ、見る見る薄れてゆく。しかし、ほつとしたことに、その雲はやがて去ってゆく。さきほどの白い光輝はもはやどこにも見られなに、その雲はやがて去つてゆく。さきほどの白い光輝はもはやどこにも見られなかつた。天気が好転する気配もなかつた。ともかく、視界が利くうちに、自分はあそこまで行かねばならない。

作品のクライマックスに当たる増田の単独行動を語った場面である。人物の内面と情景とが一体となつて描かれ、増田の苦しい息遣いまで聞こえてきそうな箇所である。もしもこうした語り口でメルバーンも語られていたら、「表現者は行為者に対立し、同等の重みを持たねばならない」という三島の批判を、ある程度は回避し得る作品になつたのではないか。別言すれば『白きたおやかな峰』における小説としての問題点とは、語ることの叶わないものをそのまま語らぬままにしてしまつた点にあるということだ。

古く「小説神髄」（一八八五（明治18）年九月～一八八六（明治19）年四月、松月堂）で坪内逍遙が、「此人の世の因果の秘密を見るがごとくに描きいだして見えがたきものを見えしむるを其本分とハナスモノなり」（上巻「小説総論」と喝破した通り、小説とは本来、語ることのできないものを如何に語つて見せるかという点に存在意義を見出すべき芸術表現であろう。失敗に終わることはストーリーの上でも暗示されているが、最後の増田の必死のアタックは成功したのかしなかつたのかはホワイトアウトの世界の中に消されている。実際には「アタック隊はあと百メートル足らずで挫折した」（カラコルム登山隊に加わって、「文芸」一九六五（昭和40）年十月）のだが、虚構世界と現実とが直結しないのは当然ではあるものの、この結末の語られ方には、語り手がこの一編で語るべき「因果の秘密」を遂に見出し得なかつた様を伺うことができる。些か強い言い回しで敢えて言えば、三島の言う「言語の側からの憑依力」を欠いたまま物語 자체が「挫折した」と言えるのではないだろうか。「物語」というものが小説の本道なのである」と北は言つたが（「魔の山」の思い出」「世界文学全集「魔の山I」月報、新潮社、一九六三（昭和38）年

八月）、物語の面白さを最大限に引き出しながら、読者に「見えがたきものを見えしむる」ように仕向けていくところに作家の、そして小説の「アプローチ」なるものが存するはずである。

先に引いた通り野坂論には、「作者、北杜夫が、ドクターを徹底的に書けない人間として造型することによって、一巻の表現者たりえている事情を明らかにするものとはいえないだろうか」との注目すべき指摘があった。

「おれには書けない」

と、思った。

あの雪と岩の織りなす微妙な陰影、あの複雑な隆起と陥没、あの肌理こまやかな優雅さと峻厳な重量感、自然が太古から一撃々々彫り刻んできたこの莊嚴な記念碑を、一体どう表わしたらよいのか。

あれを文字に刻みつけるにはもつと卓越した才能が要る。しかも、さらに望むなら、その作家は山に登れなくてはならない。山巔の希薄な大気を吸い、ガスに包まれ、岩を攀じ、氷にステップを切り、巨大な山のもたらす苛酷な恐怖に肌を触れねばならない。それだけでも、なお書けぬかも知れない。そういった一切の記憶と体験が忘却の中に霞み去ったと思える或る晩年の一日に、彼はひよつとしたら書けるかも知れない。おそらくは架空の幻想の山を。しかしその中には、たしかに真実の山が含まれていてる筈だ。

ドクターの視座から捉えられた自然が彼の内面の呟きと一体となつて語られている。そしてここには、「書けない」ドクターを通して圧倒的な自然の莊重な様子と、その前に佇み己の卑しさに竦んでいるドクターとが語られることによつて、この小説が意図しているであろう自然と人間との、正に「相克」（北）が結果的に語られている。だが、問題はここからである。〈書けない作家〉を語る形で語れぬ世界が果たして十全に語られているかどうか、この一点に作品の価値はかかっている。読み手をあたかもディラン峰のすぐ傍まで連れていってくれるような物語の面白

さは十分感得されるが、その更なる高みにあるはずの、「見えがたきもの」に達する地点までは必ずしも届いてはない。「たしかに眞実の山が含まれている筈」の、語られるべきへ山の世界^vとは如何なるものか。これを、説明ではなく物語を通じて描写し語られた世界の中に定位させること。その困難さの向こうに、傑作としての小説の創造の神は宿っている。

『白きたおやかな峰』は、安岡章太郎が指摘する「新雪のようにさらさらした純白の文章」によつて、メルバーンのような忘れがたい登場人物が、「無垢な抒情」（安岡）といった北文学の特長を有した形で生き生きと描かれた抜群の面白さを誇る作品である。しかし同時に、どこか物足りなさを覚えさせる作品でもあるというのが私見である。その理由の一端に、述べたような語り得ぬものとの闘いの強度不足があつた。そうした意味から言えば、同じくカラコルム遠征を題材に、私小説として老いや子どもとの関わりを静かな筆致にのせて語つた、作家自身は「小品」と位置づけたの「白毛」という短編小説の方が、自らの生の課題という語り得ない世界を語ろうと試みている点で、体験した素材をよりうまく活かしていると言えるかもしれない。因みに「白毛」では、メルバーンのことはまったく触れられていない。